

みんなの中の自分

竹林実紀子

不安な思いを抱いている入園したての子どもにとつて、これまで親に依存していた子どもにとつて、保育者は新しい生活に飛び込んでいくときの手がかりになる存在である。それだけに、まず保育者と子どもとの間に信頼関係が成り立つよう努力することを、何よりも大事にする必要がある。自分のす

べてを丸ごと受けとめてくれる存在であると、子どもが感じてくれるようになることが大切である。子どもは、保育者との間に培われた信頼関係を意識できるようになることによって、精神的にも安定した生活が営まれるようになっていき、自分を発揮することもできるようにもなる。そうした安定した

状態をいかにしたら生み出すことができるかが、入園当初の重要な課題でもあるが、その土台となるのが、一人ひとりの違いに目を向け、その違いに応じたかかわり方を考えていくことである。

これは、今は四年生になっているY君が入園して一ヶ月ほど経ったところの話である。Y君には、その当時小学校六年だった兄と二年の姉とがいて、母親にはとてもかわいがられて育った。

この年の子どもは、自分の思いを強烈に主張し、行動化することが多かったが、その中でもY君の様子は際立っていた。自分がやれるか、自分ももらえるか、自分の言い分が通ったか、自分、自分、自分。いつでも、どこでも、何事においても、自分主張の激しいY君であった。常に自分のペースで生活して、それが当然と思っている、というY君でもあった。

五月も半ば過ぎのある日のこと、みんなは帰り支

度も終わり席についていた。しかし、Y君だけはまだ遊び着のまま、カバンは床の上、といった状態であった。

「Y君、さあ着替えようね」

そう言つて何度も働きかけはするのだが、当人はなかなかその気になれない様子で、床にペタリ座り込んでいる。さらに促すと、「うん」とは言うが、状態に変化は見られない。そこでY君のことはA保育者に任せて私はみんなに紙芝居を見せることにした。ただし、Y君にも見えるようにと紙芝居の画面をY君の方に向けて行うことにした。ところが、Y君はそれが気に入らなかつたのである。

「ボクが、まだ、すわつてないのにーッ！」

と言つて泣きわめいている。自分を抜きにして紙芝居を始めてしまったと怒っているのである。

「ほら、ほら、だから早く着替えようね」

そう言われても着替えようとはせず、すねてハン

ガ―の掛けてあるロッカーの中に潜り込み、「ボクがすわってないのにーッ！」と泣きわめいている。そうした主張は、Y君にとつては、そしてこの時期の子どもにとつては、当然のことでもある。地球は自分を中心に戻っているぐらいに思っているような子どもたちなのだから……。

紙芝居が終わってもまだ着替えていないY君を待つ意味で、歌をうたうことにした。ところが、それもY君は気に入らなかったのである。

「ボクが、まだだよーッ！」

「ボクが、うたいたいよーッ！」

怒って、泣いて、じだんだを踏んでいる。そうしたY君に、A保育者はゆったりとかかわりながら、着替えるよう促している。しかし、Y君はただただ怒っているのみである。

そうこうしているうちに、帰る時間も迫ってきた。そこで牛乳を飲むことにした。すると、それも

気に入らないと言って怒るのである。だからといって、Y君を待っていることはできず、帰る時間になったので「さようなら」と言ってみんなは帰っていった。

みんなが帰った後、「さあさ、ほら、ほら、ほら」とY君を着替えさせて、連絡帳やプリントをしまうこともこちらでやってあげた。その後、牛乳を飲んだら帰すつもりでいた。しかしY君はそれでは承知できなかった。

「ボクは、まだ、なんにもしてないよーッ！」

と泣きわめく。

「ボクまだ、かみしばい、みてないよーッ!!」

とのことである。そこで、Y君ひとりのために紙芝居をした。

「うた、うたつてないよーッ！」

とも言うので、みんなであつた歌を全部うたひ、その後で牛乳を飲み、それから「さようなら」

と、みんながやったことと同じことを全部やって、それから帰っていったのである。その時のY君の顔は、いかにもうれしそうで満足気であった。

こうした状態は、一見、わがままとも受け取れるが、決してそうではない。Y君にしてみれば、当然の主張をしているのであり、その気持に添うことをまずは大切にする必要があると考えたのである。その後で、徐々にそうではない状態もあることを知っていくよう働きかけていった。つまり、自分の主張が常に通るとは限らない、ということも感じわかっていくよう働きかけていったのである。

例えば、同じようなことが起きたときに、「今日は、歌はうたわないよ」と言ったり、「歌も紙芝居も今日はナシよ。だって着替えようねって、何度も何度も言ったのに自分が着替えなかったんだもの。仕方がないわよね」といった対応をしたり、時には「もう着替えなくてはダメッ」とかなり厳しい姿勢

で臨むこともあった。ただ、Y君のその日の様子や周りの子どもたちとのかかわりも含め、状況に適切な対応を心がけた。その上で、世界は自分のためだけに存在するわけではないことをY君が知っていく機会は大切と考えたのである。

一人ひとりの育ちを考えると、まずはその子どものあるのままを受け止めることが重要であると思っている。そのことよって、受け止めてもらっている自分であることを感じ、精神的にも安定していった、保育者に対する信頼感も強くなっていくと思うからである。そして、そうしたことが土台となつて、相手の存在を感じるようになったり、かわりを意識する気持が育っていくようになる



思っている。つまり、今はどうすべきなのか、どうする必要があるのか、といったことを、Y君が自身で考え、行動できるようにするための根拠として、まずはY君の思いを受け入れることが重要なことであると思っているのである。

Y君の「ボクはーッ……」の主張は、ひとりでない自分、みんなの中の自分を感じていると見ることが出来る。だからこそその主張であると思う。ただそれを本人が自覚しているわけではない。しかし、帰りの集まりの時間に共に過ごす相手が存在することで、意識化が促されていたと考えられる。そして、そのことがY君の動きに影響を及ぼすことにもなり、変化へと結びついていくことにもなったように思う。しかもそのことはY君ひとりの育ちの問題にとどまらず、周りの子どもたちの育ちにも影響を及ぼすことにもなっていたのである。

例えば、一学期も終わるころには帰る時間がきた

この合図があると、だれともなく片づけを始め、いすを並べて帰り支度をして腰かけているという動きを、保育者が何も言わなくても自然な調子で行うようになっていった。また、三学期には、急な来客で私がちよつと部屋を空けている間に、子どもたちだけで帰り支度をすべてやり終え、「さようなら」を言える状態になっていたということもあった。保育者がいるいなかかわらず、子どもたちは帰る時間である今、自分はどうすべきなのか、自分たちはどうしたらいいのかを意識して行動していることが感じられたのである。

帰りの集まりに対する受け止めは、一緒に行動することに抵抗を感じたり、一緒に行動することで安心したり、一緒に行動しなければならぬと思ったり行動していたりなど、子どもによってさまざまであろう。と同時に、時期によっても、一緒に行動しようとする気持の育ちや、今自分はどうすることが大

事なのかを考えて行動するといったような意識の育ちに違いが見られる。そうした一人ひとりの違いと時期の違いに目を向け、それぞれの違いに応じたかわり方、つまりは具体的な保育内容を考えていく必要があると思っている。

ところで、ここで、もう一つ大事な問題がある。それは、保育者間の連携の問題である。Y君への対応に際して、もしA保育者と私との間に行き違いが生じていたとしたなら、あの場の状況も違っていたと思う。二人の間でうまく連携がとれたのも、お互いに相手を信頼し、相手の思いを感じとれる関係にあったことによるもので、そのことがあのような結果を生み出したのだと思う。

それに加え、もう一つ大事なことは、親と保育者との間の信頼関係の問題である。A君が遅くなることに對して、保育者は焦ることなくかわることができた。母親も落ちついて待つことができた。それ

というのも、お互いにお互いを信じていたからである。信じ合う関係がつくれていたからである。

ところで、子ども・親・保育者、それぞれの間の信頼関係は、毎日の生活の中の何気ないかわりによつて生まれてくるものであり、ほとんど無意識であるようなときの影響力の方が大きいように思う。つまり、そうしたときに本心が見え、本能的にそれを察してしまうからである。そのことをしっかりと心にとめて、子どもとも親とも自分とも向き合っていくことを大事にしたいと思っている。

(桐朋学園桐朋幼稚園)